



「はあ…また不採用。何がいけなかったの？」
短大出で成績も良くない。高望みだったのかな。



この度は、弊社の新卒採用
選考にご応募いただき、あ
りがとうございました。

田村様の応募書類をもとに
社内で慎重に検討しました
結果、誠に残念ながら、今
回はご期待に添えない結果
となりました。

今月は早くもお財布がピンチ。
就職浪人…絶対やだ！



家が貧乏で、欲しい物なんてめったに買ってもらえなかった。その反動なのか、欲しいと思うとがまんできない。あればあるだけ、お金を使ってしまう。



トボトボ

翌日、途方に暮れていた私に一通の信書が。
送り主は、私が落ちた会社。今さら何だろう。
欠員が出て私が採用されるだったらいいな。



住菱インタラクティブ
株式会社

「弊社と関係の深い、有和コンサルタント株式会社の特別採用のご案内」

ゆうわコンサルタント。聞いたことないな。でも、
住菱グループの系列会社と関係が深いっていうん
だから、変な会社じゃないはず。行ってみるか。

面接当日

この辺りなんだけど。

どの建物？あ！あれだ。
あのビルの五階。



「面接に来ました。田村です」

「田村さんね。」

ようこそいらっしゃいました。
そちらに掛けてお待ち下さい」

「こちらへどうぞ」

しばらくして会議室へ通された。
面接は私一人だけか。特別採用
とか書いてたもんね。

5F 有和コンサルタント株式会社

「始めに、当社の業務は守秘義務の多い仕事です。

まずは、ここで見聞きした内容や書面の中身など、知り得た一切の情報を外部に漏らさないことを承諾してもらいます。この書類をよく読み、納得した上でここにサインを」

「はい」

「それでは、弊社の業務内容について説明いたします」

「謝罪担当ですか」

「業務は他にもありますが、田村さんには当面の間それを担当してもらおうと考えています」

企業・個人から委託を受けて、その顧客の代理で謝罪を行う…か。ちよつと聞いたことある。謝罪代行だっけ？期待してたのとは全然違ったなあ。

「こちらが雇用条件です」

一ヶ月の見習い期間後に正社員契約か。わあ！お給料いい。案件ごとに寸志や賞与が出ることもだつて。昨年の採用者の実績…一年目からこんなに！って逆に怪しくない？

「依頼主にとって重要な顧客や取引先への謝罪です。責任重大ですし、はつきり言ってストレスの多い仕事です。女性は特にイヤな思いをすることが多いです。だからその分、待遇を良くしてあるのです」
なるほど。

私はウソ泣き上手だし、愛嬌もある。これまで泣けばたいがい許してもらえた。楽観的な性格だし、へんなプライドもない。やれるんじゃないかな。



「説明は以上で終わりですが、業務内容に関する書類を十分確認した上で、当社への採用を希望するか判断してください」文字びつしり。こんなの読めないよ。
大企業グループの会社の紹介だもん。条件最高だし。

「納得の上で記入されましたか」「はい」
「それでは、あなたの採用を決定します」

「え？今決まるんですか」

「そうです。おめでとう。春からよろしく」

「こちらこそ」やったあ！とにかくこれで一安心。

あつという間に季節はめぐり、あわただしく入社日を迎えた。それから三日間、講習を受ける。

その間、何人かの女性社員に会ったけど、あいさつ程度ですぐに仕事へ。それにしても、みんな可愛いくて驚いたなあ。ただ、どこか浮かない表情の人も居て、想像よりも大変なのかなあ…なんて思ったり。



そして今日。いよいよ初仕事。緊張するけど、男性社員が同行してくれるから安心。でも、あの先パイ。無口でちよっと苦手だなあ。

「行くぞ」「あ、はい」

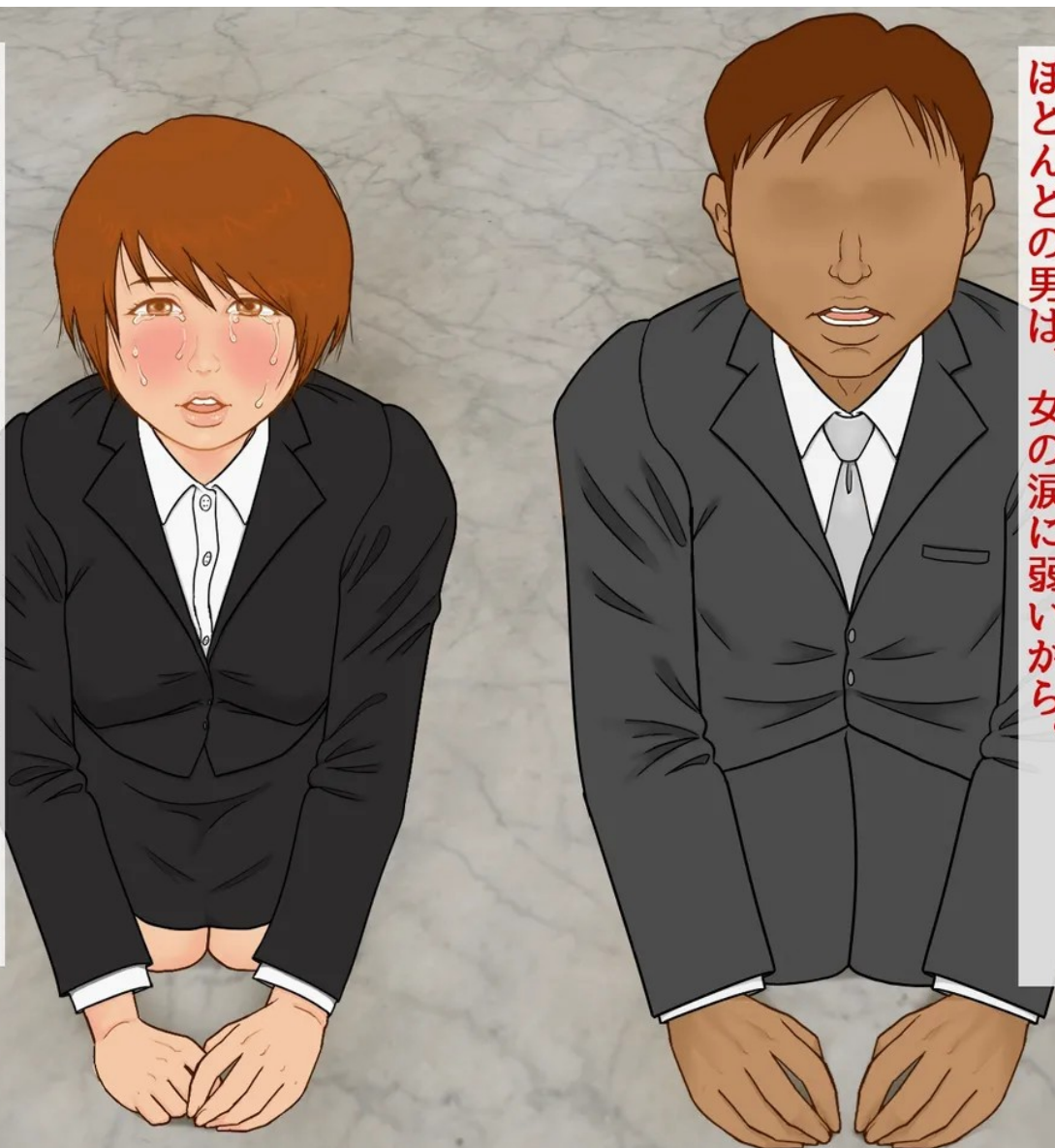
着いた。大丈夫。教わった通りやれば問題ない。

まず、先パイが謝罪文を読み上げる。

「：誠に申し訳ありませんでした」

続いて私が涙声で大げさに

「この度は、本当になんとお詫びすればいいのか」
ほとんどの男は、女の涙に弱いから。



「二人共、顔を上げて。誠意は十分伝わりました」
「それでは」

「はい。これまで通り、取引を継続しましょう」

「ありがとうございます」
初仕事は楽勝！

その後の仕事では、しつこい相手も居て。

「この前のやつはどうした？あいつが誤りに来るのが筋だろ！」

「おっしゃる通りなのですが、あの者は今回の件で体調を崩しておりまして。今は、反省して食事も喉を通らないほど憔悴しております」

グスツ



「フン。少しは反省しとると言うわけか」

イヤな顔。そんなのウソに決まってるでしょ。

「そういう事情なので私達が代理で」私は目を閉じ、うつむき加減、わざと大きく開けた胸元を見せる。ジロジロ見てるのが見ないでもわかる。

「この度は不快な思いをさせ、大変申し訳ありませんでした」はい。これで終了。

ストレスを感じることもあるけど、会社に戻れば
「今回は大変だったね。少ないけどこれ」



三万円入ってる！報われるなあ。
もっとお金がほしい。世の中やっぱりお金だよ。

そして入社一ヶ月が近づいた頃。

「明日の案件は、これまでとは違うぞ」

「どんな風に？」先パイは、私の質問には答えず

「お前一人で謝罪するんだ。そして、謝罪が成功

すれば賞与は百万円」「百万円！ほんとに？」

「本当だ」それだけ難しい案件ってことか。



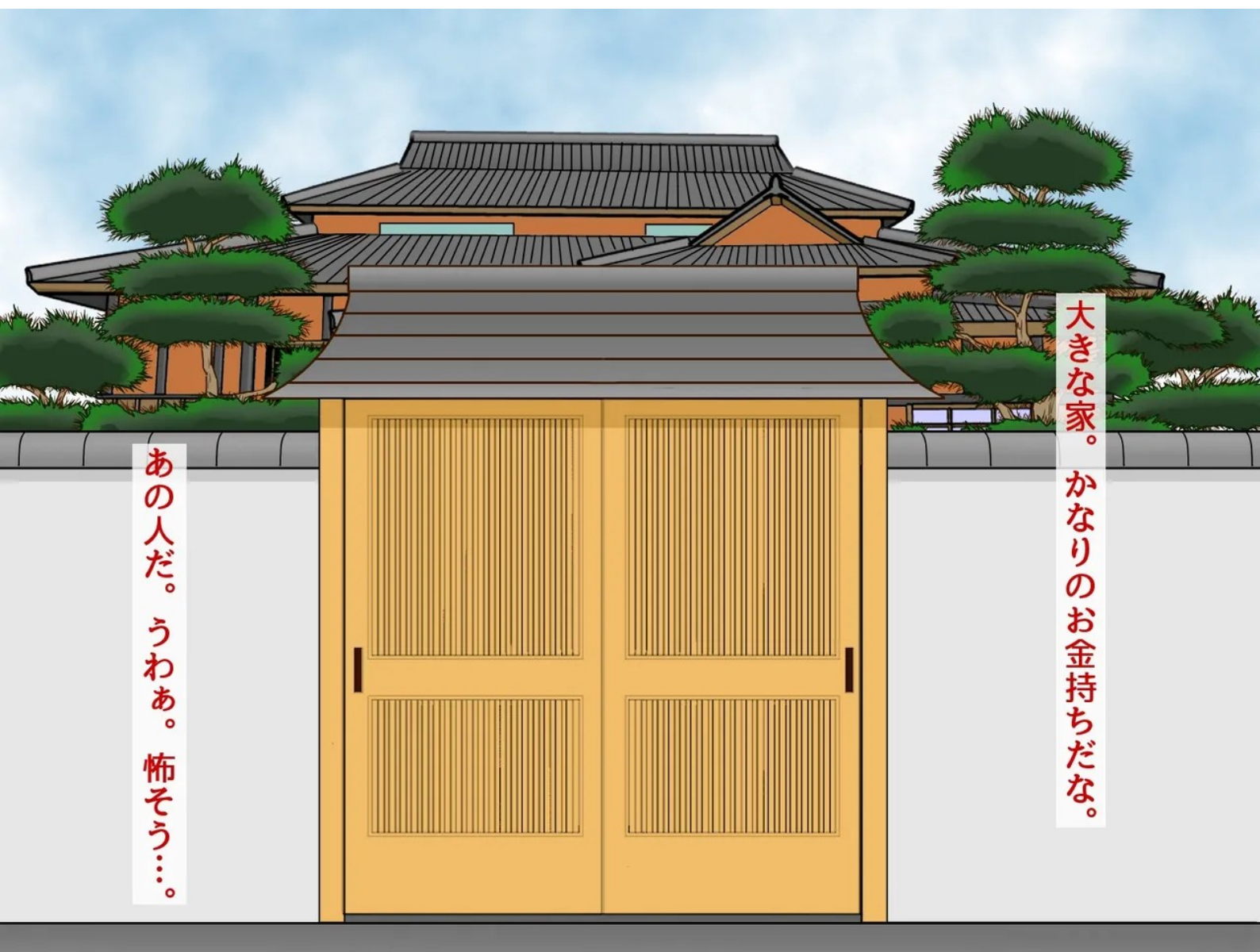
「失敗したら今月でお前はクビ。依頼主に大損害が出るからな」「冗談ですよ」また何も答えない。

「引き返すなら今だぞ」「何ですか大げさに」

めずらしく溜息なんてついて。相当大変なのかな。

でも百万円だよ。やるに決まってる！

そんな大金もらえるなら、なんだってやるよ。



あの人だ。うわあ。怖そう…。

大きな家。かなりのお金持ちだな。

今日は、私が謝罪文を読み上げ、いつものように
涙声で平謝り。続けて土下座しようとしたその瞬間
「待て待て。それで謝罪してるつもりか」
「？」「私の口から言わせるのか」



「いえ。失礼しました。田村、着てるもん全部脱げ」
「え？」「全てをさらけ出して謝罪しろとおっしゃって
るんだ」
「でも」「モタモタするな。早く！」
「はい」

「ほお。ワシのところに謝罪に来るだけのことはある。今までは、そうやって泣けば許してもらえたんだろうが、今日は世間の厳しさを覚えて帰るといい」

講習の中で、性的ハラスメントを受けるケースは良くあるって聞かされてたけど。

グスツ

「まだまだ。やっと謝罪の準備ができたに過ぎん」
「田村。もっと自分の全てをさらけだせ。自分の恥ずかしい部分も全部。M字開脚。知ってるな」
M字って…そんな。「田村あ!」「はいっ」



「これは珍しい。顔を隠しての謝罪なんて初めて見た」

うう…恥ずかしいよお。

ブルブル

「まだ足りん。自分の局部を広げて中までさらしなさい」

そんなのできないよ。

先パイの険しい顔。失敗したら大損害で退職って。もう、やるしか…。

ぷる



「そのまま謝罪の言葉」

「この度は、大変申し訳
ございませんでした」

うう…

グスッ

「よくやった。立派だぞ」

悪い冗談みたい。
なんだか
笑いそうになる。

ぷる

ぷる

くぱあ

「君の謝罪を受け入れよう」
とにかく終わって良かった。



「では、こっちへ来なさい」

「はい？」

「謝罪を受け入れると言っただろ」

「え？」



「避妊薬は飲ませてありますので」「うむ」

「避妊？ そんなの飲んでないし、それに何がなんだか。」

「大事な仕事の前には、これを飲んでいくのが通例になってる」もしかして来る前に飲んだあれ？

先パイが私に耳打ちする。

「やめてもいいぞ。会社や依頼主は損害を負うが、お前には関係ない」

「でも、先パイにも迷惑が」「お前には関係ない」
どうしよう。百万円…。

結局、私は。

「よくこれだけ恥知らずに
ふくれ上がったものだ」

あっ

「いつもセックスのこと
ばかり考えてるんだろ。
最近の若い娘ときたら」

「胸の大きな女は性欲が

強いというからな。

お前は、よっぽど性欲

が強いんだろう」

もみもみ

もみもみ



「おいおい。少し揉んだだけだぞ。乳首をこんなに立ておつて。呆れた淫乱娘だな」

「仕方がない。お前の気の済むまでワシが舐め回してやる。感謝をしろよ」

あぁっ

ペチヨ

ピチヨ

「ほれほれ。こうか？」

むぎゅう

むにゅう



「もっと舌をうまく絡ませろ。
せっかくワシが舌技を披露
してやろうとしておるのに」

チュパッ

むにゅ

んんっ

しつこい…。
いつまでキス。
ヨダレが汚いよお。

お金のことだけ考えよう。
終われば百万円。百万円
だよ。短時間で、そんな
大金がもらえるんだよ。
そう思えば。

ああん

んっ

たっぷん

たぶ

パコッ

パコッ

突き心地が良いぞ。
二十歳の小娘にし
ては、中っいい穴
してるじゃないか。

…どうして私が
こんなおじさんと。
イヤなのに感じて
自分もイヤ。



私がいやらしいわけ
じゃない。私は、
そんな女じゃない。
私は違う。違う。

ああん

あっ

むにゅっ

むにゅ

ほれほれ、もっと喘げ。
鳴け！よがれ！悶えろ！
このドスケベ娘が。

ヌプン

ズプン

気を逸らそうとしても、
声が出ちゃう。
でもそれは、この人が
遊びなれてるからで。



あぁ...

ぐんぐん

むにゅ

むにゅ

どっど

どっど

イヤっ。やめてよお。

こんなにイヤなのに
もうイきそう。我慢
できない。やめて...
お願い...ダメ...

腰使いが速くなっ
てる。中に出され
ちゃう。本当に
避妊できてるの？

「簡単にイきおったわ。
たわいない。ワシに
かかれば、二十歳の
小娘なぞこんなもの」

「ひどいと思うか」「ひどいです。こんな…」
「警告はした」「あんなので分かるわけ」
「ちゃんと面接の際の書類とか読んだのか」
「…」



逃げ道はいくつも用意してあった。ただ会社は、こういうやつを選んで採用している。金に執着心の強いやつ、借金を抱えているやつ。その上、うかつなやつ。こいつは運悪く、うちと関係の深い会社ばかり受けて意図的に落とされてきたのかもな。あちこちの学校に息のかかったやつが居るとも聞く。

「これからもっとひどい案件もあるだろう。金さえ貰えればそれでいい。そう割り切れないなら、辞めることだ」
「…」



「数年辛抱すれば、普通の会社じゃ不可能な大金が手に入る。資産家に見初められて愛人になり、逆に謝罪を受ける側に回ったやつもいる」

「どうするかは、お前の自由。
さあ、受け取れ。賞与の百万円」

この金を見る顔。あんなことがあった後なのに。
田村、正社員契約おめでとう。



「この度は、誠に申しわけありませんでした」



ブルブル

「いい天気だね。絶好の青姦日和だ。お天道様の下、ワシのチ○ポで子宮をほじくり回してあげようね」



「若いねえ。
たまらんな」

「まだ二十歳なんだってね」

ズピッ

ひぎい

スパン
スパン

「外でするのは
気持ちいいよね」

はああん

「ケダモノみたいで」



ああん

「動物と違って人間は」

ドププ

もうダメ

ヒクヒク

イク

ビクン

「年老いたオスでも
若いメスと交尾できる」

「金や権力があればやり放題だ」



言われるまま相手の
ところへ行き、謝罪し、
抱かれ続けた。

ああん

ズププ

ヌププ

その後も、
性行為を伴う案件を
いくつもこなした。

ああ

たっぷん



十回謝罪して十人に。
感覚がマヒしていく。

ああ...

あ...

たぷたぷ

ドクドク

ドピュドピュ

案件一つで百万円。
入社三ヶ月で貯金は、
一千万を超えた。

「辞めても再就職先のあつせんは有るし、短期の雇用でも他よりはずっと多い退職金が出る。本当に辛いときは、遠りよなく俺に言え」
先パイは無口だけど、たまにやさしい。

誰にも話せない仕事。その秘密の共有相手。
私は先パイを好きになりはじめていた。



「先パイは、どうしてこの仕事をしてるんですか」
「借金があるんだよ。別に俺が作ったものでもないけど」
そんな事情があつたんだ。

「女性の謝罪相手に…」 「あるよ」 私と同じ。

「でもな、相手が必ず異性を望むとは限らないんだぞ」
え？それって。

「腹減ったな。何か食って帰るか」 「はい！」

今日の仕事は謝罪ではなく、投資の約束を取り付けること。相手は女性の資産家だ。

ほとんど裸。おっぱい大きいなあ。それにキレイ。正直、汚いおじさんにされるより、ずっといいかも。



「ご一考のほどお願い申し上げます」
「分かりました。前向きに考えましょう」
「それでは」

「ええ。了承と受け取ってもらって結構よ」

「ありがとうございます」

「それじゃあ、服を脱ぎましょうか」

「はい」 覚悟はできてる。

「まずは『これ』を啜えてちようだい」
「!!」 ニューハーフ? ぞ、そんな…。



「終わったらお呼びください」
「待つて。あなたも参加なさい。」
今日は、私とはしなくていいから、
一緒にこの子を可愛がるのよ」
「承知しました」

「私は男も女も両方いけるの。今風に言えば二刀流
ってところかしら。ちよっとおじさん臭かったかな。
アハハ、だって中身はおじさんだもの」

ん
う
う

ジュ
プ

ジュ
プ

「そんな可愛い顔でしゃぶられたら、
すぐに出しちゃいそうよ。そうだ」



「先にこの子のオマ○コ
使っていいわよ」

チュプ

むにゅ

!

「ちゃんと
中に注いで
あげてね。
たっぷりと」

「はい」

どうしよう。
先パイ、私…。



これが先パイの…。
おつきくて固くて

ジュプ

ううう

むにゅ

ズズズ

ヌズズ

「うれしいでしょ。
好きな人のモノで
貫かれて」
なんでそれを。

「彼に気があるんですよ。
目を見れば分かる。
だから参加させたの。
やさしいでしょ、私」

田村、すまん。
こんなことになるなんて
考えもしなかった。

私の膣の中で先パイ
が射精してる。
ああ。先パイの精液
が私の子宮に…。

ドピュッ

ひゅっ

ぷるるる

ドプッ

ドプッ

「行きがかり上、3Pになったことは会社
に伝えとく。金額に上乘せがあるはずだ」

そう話す先パイの声に気まずさは感じられなかった。けれど
その眼差しには確かに、私を氣遣うやさしさがあつた。



二人が前後に入れ替わって何度も私を。

いいよ。何回でも飲んであげる。先パイのなら。

ズチュ

んっんっ

パンッ

パンッ

ズグズグ

たぽん

ああん



ゴンスゴンス

oooooooo

あ...あ...あ...

私で気持ちよくなつて。
いっぱい私の中に...。

ゴウン

ゴウン

ピンスピンス

ああ、先パイ。

ヒクヒク

「次の謝罪は避妊なし？」 「そういうご希望だ」
「賞与の額は」 「五百万」 「！」
「妊娠して子供を産めばプラス五百万で計一千万」
「一回で一千万…。」



「相手は、うちの社員十人に同じことをさせて、
その内七人が妊娠してる」 「…」
「断っていいんだぞ」 「やります」
「本当にいいのかそれで！」 私を止めようと本気で。
だけど、もう後戻りできない。

「あの会社の二代目は懲りないというか。亡くなった先代に息子を頼むと言われててね。困ったものだよ。聞いてるかもしれないが、彼が君の会社に泣きつくのは初めてじゃない」



「困ったことに彼は、私の性癖や好みをよく知っていてね。おそらく先代の入れ知恵だろう」

「私は、自分好みの若い娘を孕ませるのが大好きだ。君は百点満点だよ。必ず妊娠させてあげるからね」

「私の子供を産む覚悟。
できているようだね」

あぁっ

パンッ

いいっ

パンッ

ズブゥ

「この年で立派だろ？
コレで今まで何十人もの
若い女性を孕ませてきた
んだよ」

ヌブゥ



「大きくていい尻だ。
これなら安産が期待
できるだろう」

あ……あ……

ドクン

ドクン

「若い頃は絶倫と言われたが、
今日の目標は五回。たったの
五回。年は取りたくないね」

ピュピュウ

プンプン

「どんだん出すよ。
お嬢さん」

「そら！二発目」

「三発」「四発」

こんなの本当に
妊娠しちゃう。

私、まだ
二十歳だよ。

こんな老人の、
好きでもない人
の赤ちゃん、
産みたくないよ。

ひい
ひい

ひ
っ

ひ
い
っ

ズボズボ
パコン

ズボズボ
パコン



そうだ、お金。
お金のこと考えよう。
気持ちいいこととして
お金貰って

「五連続種付け
プレス」の完成だ。
これで君の妊娠
は間違いない」

私はずっと…
ぜいたくな暮らし
…続けていくの。

い
い
い
い
い

先パイと…一緒…

ひ
ひ
ひ
ひ
ひ

プレスプレスプレス

プレスプレスプレス

ポタポタ

ドロドロ

「残念ながら俺のことを気に入ってるのは、あの
ニューハーフの資産家だけだ。俺は可愛げが無
いんだとさ」フフ。言ってる。



「まあ、汚いババアに気に入られてもな。
俺は、コツコツ働いて借金を返していくだけさ」

『私が稼いで先パイを養うって方法もありますよ』

そう言おうか迷いながら、今日も私は。

妊娠してからは、ほとんど産休みたいな感じで会社にも行っていない。先パイにもしばらく会っていない。子供を産んだ後、どうしようか。十分お金は稼いだし、もう辞めてもいいんだけど。



「先パイは将来、子供何人欲しいですか？」
「ちゃんと考えたこと無いなあ。まあ、一人じゃさびしいだろうし、二人は欲しいかな」

しばらく前にした何げない会話。

着信中

「先パイ。お久しぶりです」
「久しぶり。別にその、用ってわけでもないんだけど…どうしてるかなって」

おわり



あのニューハーフの人と先パイと3Pをした日。
写真だけで相手が女性だと思い込んで、避妊薬を
飲んで行かなかった。

避妊無しで中に出したのは先パイ、
ニューハーフの人の順。

そして、お腹の子は双子だった。
だから信じてる。きつと。



「私ね。時々無性に女を抱きたくなるの。可愛い子が入ったって言うから楽しみにしてたのよ」

「女の口の中に出すのは久しぶり
だわ。これもいいわね」

んんん

ゴクッ

ドクドク

「オマ○コに出すのが楽しみに
なってきたわ。彼と二人で
たっぷり注いであげる」

